
子猫さんと狼さん

雪野 椿姫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

子猫さんと狼さん

【Zコード】

Z8205P

【作者名】

雪野 椿姫

【あらすじ】

レイカ、アオイの女子一人とケイ、ルイの男子一人の仲良しの四人・・・

「冬休みに四人でイベントをしよう」とことになり、「季節はずれの肝試し」を実行することに
だが、静かで影のうすい不思議なクラスメイトのセイラはなぜか止めようとするそしてセイラは止めるべく話を始める

この話は「肝試し」を警告するセイラが語った長い長い話・・・

プロローグ

200X年12月29日

「ええ～・・・新しいニュースが入つてきました」

「とても緊張した雰囲気のＴＶニュースだつた・・・」

「今日未明に20代と思われる男性の遺体が見つかったようです。死亡推定時刻は昨日の9時以降から12時あたりと見られています。死因は青酸力りによるもので警察は何者かによる殺害事件と見て捜査を続けています。」

次の年の1月24日

「新しいニュースです。」

「数年前の12月29日のニュースと同じように緊張した雰囲気だった

「今日未明、20代男性と10代から20代前半と思われる女性の二人の死体が見つかりました。その二人の男性は、拳銃による射殺で、女性は、数年前の事件に使われたものと同じと見られる青酸カリによる自殺のようだ」

1 An event of the winter ジアオイ視点 (前書き)

A test of a courage

1 An event of the winter ソアオイ視点

「ああ～ダルイ～」

レイカとケイの二人の声がハモついていたからつい笑つてしまつた
「確かにそうね 今日の授業はちょっとねえ・・・」
いくら勉強が好きな私でも、体が固まつてしまつほど疲れる授業だ
つた

「ほんとだよな・・・俺とかバカだから無理・・・死んじゃう～ ル
イとアオイはそんなことないと思うけどな」

ケイは相変わらずスポーツ一筋つて感じの笑顔で答える

「そんなことないよ～・・・今日は ね!? ルイ」

私たち三人より少しあなれたところで顔に本をかぶせ寝ている・・・
ようく見えるけれど私は寝たふりだと思つたから問い合わせた

「ああ？・・・そうだな・・・」

いつも口数少ないから会話が続かない

「ええ？ ルイも？ 私授業中寝てた」

「だめだよレイカ！！ 少なくとも授業中は寝ちゃダメよーーー！」

「は～い 僕レイカの寝顔見ました～」

「つたく・・・アオイはまじめだな」

放課後に私たち四人は話をして、日が暮れそうになつたら帰る
そのくらい仲良し・・・だけどいつも四人バラバラでほかの人たち
と仲良くしている

「つちよ・・・ケイ！！ 勝手に人の寝顔みないでよ～

「寝てたお前が悪いんだろ」

ニタニタしながらケイが答える

正直言つてこの一人お似合いだと私は思つ

「そういえばよお・・・もう少しで冬休みだな」
寝たふりをやめてこっちに歩いてきながらルイが言った

「そうですね！ イベントしたいです！」

「俺も！」

「あたしも～」

「・・・俺も」

「やっぱそれは～ クリパでしょ！」 クリパ・・・クリスマス・パー・ティー

お似合いさんお一人はすぐ嬉しそう

「なんか普通じゃねえか・・・？」

「そうですか？ 私は良いと思いますよ？」

「ん～・・・じゃあ変える？」

「あたし 季節はずれの肝試しがいい！！」

肝試し・・・無理！ 無理！ 私超怖がりなんだから～・・・

「・・・俺賛成」

「俺も！」

「アオイは？」

ケイがポケットからキャンディーを取り出しながら聞いてきた

「・・・もしかして怖いのか？」

ルイがニヤニヤしながら聞いてくる

でもみんなに迷惑かけたくないし・・・

「つち・・・違うよ～ ゼンゼン平氣です・・・」

だんだん声が小さくなりながらも答えた

「本当は怖いんじょ？」

レイカは幼馴染だからよく分かってる

「大丈夫俺らついてるから」

ケイが背中をポンとたたきながら言った

「やりたくも無い人を無理やり肝試しに連れて行くのはよくない・・・

・・・

クラスの端っこからすこし枯れた女の人の声が聞こえた
髪型は髪が多いからもさもさしていて牛乳瓶の底のように厚いめが
ねをかけた怪しい女の子がやってきた

「こんにちは」

顔は知ってるけど名前は知らない・・・クラスメイトなのに
それくらい影の薄い女の子が話しかけてきた
挨拶をするのが礼儀だと思うし変な沈黙を作らなくていいと思つた
ので挨拶をしておいた

「あなたたち私の事知らないでしょ？」

「しらねえ」

緊張感も無く笑いながら即答してしまつケイ、それが彼のいいとこ
でもあり欠点でもあると思つ

「私の名前はセイラ 肝試しはしちゃダメよ」

そして彼女はニヤニヤしながら一言、静かに告げた

「A test of a courage」

2 And she has begun to tell it (前書き)

When I try a test of the coura
ge?

2 And she has begun to tell it

「じゃあ・・・とにかく肝試しはしちゃだめよ
彼女が振り返り、めがねをクイと直し教室から出る瞬間となりにい
たケイが

「おい 何でだよ 理由を説明しろよ

まるで幼稚園の子供みたいにセイラに話しかけた
クククツ・・・と笑つてからまた彼女は口を開いた

「そんなに知りたいの?」

『この女の子は気味が悪い』

本人以外はそう思つていたに違いない

「・・・明日の同じ時間にココに来てね」

セイラはもう私たちとは反対の方向を見ていたから顔は見えなかつ
たけど

彼女のめがねは手に握られていたのが見えた
そしてその少女はこの部屋を後にしたのだった

（次の日）

「ねえアオイ」

あの少女はいつたい何私たちに警告したかっただろうか

「ねえ！」

「はい？」

考えすぎか？アオイは、レイカの声もろくに耳に入つていなかつた
「せつかく人がパン買ってきてあげたのに食べないつもり？」

今日はたまたまだけどいつも四人が集まっている
言うまでもないけれど『アノ子』が言つてることが気になつて仕
方がないからだった

「つたく・・・同じクラスなんだから普通に話せっての」
ちょっと怒りながらケイが口を開く

セイラはきちんと自分の席に座り、自分の昼ごはんを食べている
「そんなイライラするよつなことか？ 話しかける気は全然ねえけどよ・・・」

「でも行くんでしょ？ 今日の放課後あたし気になるんだよね」
アオイはこれ以上かかわりたくないと思つたけど好奇心のほうが彼
女の心の中では勝っていた
「私は行こうかな・・・」

放課後

「来てくれたのね・・・」

そこに立っていたのは、セイラではなくとても美しい少女だった
でも枯れた声と、真っ黒な髪がセイラだということをあらわしていた
「まいいわ・・話してあげる・・・」

3 The gear begins to turn around for

ここからはセイラの話している一次元の世界の話になるのでセイラの会話文ですが、「」は省かせていただきます
そして、二次元の登場人物にだけ「」をつけさせていただきます

3 The gear begins to turn around for

私の名前はアミ

私にはとても仲のいい友達が三人いて
女子は私とミキ

もう一人は男子でキヨウスケ、ケント

この四人で冬休みに季節はずれの肝試しすることになった
冬休みになつて待ち合わせは12月28日の夜9：00に校門の前
・

私はほかの三人とは家が遠いから一人で学校へ行くことになる
冬なのでとても寒かつた

日も短かいからまわりも真つ暗だし・・・

本当は肝試しなんてしたくなかったし、一人で学校まで行くのも怖
いくらい・・・
でも楽しければいいかな・・・

近所の公園には満月の光で満ちて綺麗だった
その隣をすぎて、静かな細い、人通りの少ない道を通つてゆく
ここは人通りが悪いため、家族はココを通学路を通うのはよく反対
していたな・・・

「おーい！」

手を振つてゐるミキが見える

夜なのに元気なミキ、怖いものしらずつて感じ
キヨウスケはおとなしく手を振つてゐる

ケントなんか飴食べてるし

すごい元気な人たちだな。私は怖くて怖くて仕方がないのに

「怖いとか言ってたけどぜんぜん元気そうじやん」

ケントさわやかな笑顔のまま私の頭をぐしゃぐしゃに撫で回す
「・・・ペア決めするか？」

キヨウスケは性格が顔には出ないタイプだけど今日はなんか楽しそうに見えた

ペア決めした結果は

ミキ×キヨウスケ

アミ×ケント

となつた

先にミキたちが行くことになつた

「じゃあいつてくるね~」

元気そうなミキと静かにミキについていくキヨウスケが闇に消えて
いった

「なんか面白くなりそうじゃねえか？」

ケントは笑顔をたやすず聞いてくる

「う・・・うんそうだね・・・はははは・・・」

それに対しても私は笑顔が引きつる

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

そのころミキたちは・・・

「ねえ アミたち驚かせてみない？」

「はあ？ どうやつて？」

「うーん・・・じゃあねえ・・・」

ミキはキヨウスケの耳に駆け寄り静かに作戦を言った

「私が『キャア————!!』って叫んで一人が来た
らキヨウスケがいなくなつたつて演技するから隠れてね
「やつてみつか」

一人はたくらみの笑みを浮かべた

ミキの叫び声がした

「サルの世話ねえか？」

「ジ・・・ジイジヨブかな

冷や汗をかいてしまつ

「俺行つて来るから、マリエで待つておう」

私は一人になつた

「もうケントは・・・一人にされるくらいならついていつたほうが怖くないんだけど・・・」

私は考へた

？逃げるチャンスは今じゃないか？？

逃げてしまえば次三人に会ったときになにか適当なうそをつけは
いし・・・

「おい大丈夫か?ミキ」

心配そう」ミキに問い合わせた

「大丈夫……たけとヰミウスケが……」

技ができる

ケントの背後に駆け寄り

• • • • ! ! !

びっくりしそぎてケントは声が出なくなっている

三人はその後置いてしまったアミの所へ行くことにした

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「あれ？ ケント アミいないよ？」

「ホントだ いねえ」

「・・・帰ったんだろう？」

そうアミは間違った決断をした

The gear begins to

turn around from here

4 The cat loving becomes the wolf (前)

A present from Grandfather

「やつぱおとなしく待っていたほづがよかつたのかな・・・」

アミはとても後悔していた

そのまま怖い時間を持つていればスグにみんなと帰れだし、そしてなによりケントについていつて一緒にミキを助けに行つたつてよかつたからだつた

行く途中にもあつた公園・・・この公園は月明かりが綺麗なことから「月夜麗公園」と名づけられている

いつもアミは、悲しかつたり、嬉しいことがあつた日にほこの公園に来ていた

ここにあるとても大きな大樹があつておじいさんを小さいときによくしてしまつたアミにとつてはおじいさんみたいな存在だったこの『おじいさん大樹』は最近、公園を工事するときに切られてしまつという噂があつてアミは泣いたこともある

それくらい大切な木だつた

最終的にその木は公園の中の背の高い草の中に移動されたそのあたりから捨て猫を発見したときは『おじいさん大樹』が送つてくれた『妹』と言い大切に今でも猫を飼つてている

アミは後悔したことを『おじいさん大樹』にはなすことにした

「ねえ おじいさん・・・私友達を裏切るようなことをしてしまつたの おじいさんは前に猫をくれたよね? けど猫には話せるようなことじやないし・・・妹とかほかの友達を頂戴とかは言わないよ! ? ・・・けど私の話聞いてね」

優しい声で問いかけた

ガサガサ・・・

大樹の向こうで音がした

「えつ？」

アミの心の中はぐちゃぐちゃだった。何の音か分からぬ怖さとおじいさんの贈り物かもしれないわくわく感・・・

「そこに誰かいるのか？」

そこから出てきたのは

猫でもなければ新しい友達でもなかつた

？ただナイフを持ち立ちすくむ体中黒尽くめの服を着た男？

その男はすぐさま私の口を押さえしゃべれないようになした。そのうえナイフをつきつけられた

「だまつておとなしくすれば殺さないし、暴力は振るわない約束してやる。」

アミは泣き声になりながらもつづいた

そして男はもう少し奥まで連れて行つた

うつぶせで顔は見えないけれど20代くらいの男性がいた

最初はこの男を見たにもかかわらずその人が寝ていると思った

というより？寝ているんだ？という思いで、心を埋め尽くそうとした

その時ぱっと男が私に目隠しをしながら私に話し始%

「あー！ そつか！」

「でっ・・・でも一応電話しておいたほうがいいよねー?」

「・・・ミキはアミの携帯の番号知ってるだろ?」

アミの友達であるミキ、ケント、キョウスケはアミを探し始めていた

プルルル・・・

「で・・・でないよ・・・?」

だんだんミキの手と声が震え始めた

「家の番号知つてんのか?」

「うん・・・一応

プルルル・・・

「はい?」

あせった声で返事をした電話の向ひの声の持主はアミの母だった

「あの・・・ミキですけど?」

ミキは片手では手が震えすぎてまともにいられないのだが、携帯電話を両手で握り締めながら話していた

「ああ・・・ミキちゃん?」

「あの・・・アミ・・・家に帰つてますか?」

「いいえ・・・いま探していて・・・」

ミキは顔が真っ青になつた

「だから・・・ごめんなさい。いそがしいので切れますね。肝試しなんてもうじゅやダメですよ!外にいるなら今すぐ帰つたほうが多いですよ・・なにか知つてることがあつたら電話してくださいね」

ブチツ

ミキは力が抜け、地面に座ってしまった・・声を出して泣きながら・・・

「おい・・・もしかして・・・帰つてなかつたのか?」

「・・・・・やっぱタマキの言つこと聞いてれば助かつたかも知れね
ヒつてことか?」

「ああ～～～もうだめだ・・・ダメだよ・・タマキちゃんの言つこと
聞かなかつたから・・・」

すでにミキが正気を失っている

「タマキちゃん? あの影が薄い口だよね? あの後話し全然聞
いてなかつた・・・」

「こう言つてた・・・」

「肝試しつて英語で『test of the courage』
つて言つの・・・その言葉は直訳すると『勇気のテスト』つて意味
になるけどね」

・・・つて

「やっぱ肝試し(ゆづきのテスト)をした俺らが間違つてたのか・・・

・

6 His thoughts~アリ/視点~

田が覚めたら田隠しはとらわれていた
けど口と手はガムテープで止められていた
ベッドの上だつたし、足は止められてなかつたからスグに起き上がり
れだし、向こうも私を殺す気は“今は”ないんだとおもう
この部屋は壁も床もひんやりしていてコンクリート造りだった
きっと口口は地下かな？

「田覚めたか？」
「つてもかつこいい男の人が立つてた
私がびつくりしているのをよそに
「こまからガムテープをとつてやるからな」
やさしく微笑んで私の体のガムテープをとり始めた
「めんな。いきなりこんな所つれてこられても困るよな・・・と
り終わつたら全部話してやるからな」
手際よくはずし彼は私を見つめて話し始めた

「俺の名前は峰岸 春もちらん『月夜麗公園』の黒死くめの男は俺
だ」

言い終わると彼は笑い始めた
「ちょっと何で笑ってるの？」
彼は笑いながら答えた
「え？ 普通こんな事言われたらおびえるのにお前おびえないだろ
？」

おびえる？

そんなこと考えもしなかつた彼がかつこいいとかそういうんじゃなく
て・・

きっと彼がずっと黒死くめのままでもおびえなかつたと思つなんか・・・彼の優しさを昔から知つてたみたいに・・・

「なんで・・・あのとき・・・男の人が倒れてたの?」

「ん?このニュース見れば分かるよ」

この部屋はコンクリート造りで殺風景なのに色々人が住めるように家電とかたくさんあつた

そしてテレビの電源をつけた

「ええ・・・新しいニュースが入つてきました」

とても緊張した雰囲気のTVニュースだつた・・・

「今日未明に20代と思われる男性の遺体が見つかつたようです。死亡推定時刻は昨日の9時以降から12時あたりと見られています。死因は青酸カリによるもので警察は何者かによる殺害事件と見て捜査を続けています。」

このニュースが終わると彼は

「音が外に漏れると居場所が分かつてしまつのでね・・・」

と言い、電源を切つた

「これ・・・犯人はあなたなの?」

迷わず真剣なまなざしで

「そう。俺だよ。できれば春さんと呼んでくれ」

私はこのときちょっとおびえた。けれどほかの人よりぜんぜんおびえていないと思う

「なんで・・・殺したの?」

だんだん春さんに恐怖感がうつまれた

声がだんだん震える

「ん? あの人はあそこの大樹をずっとじずっと切りひつと思つた人なんだよ」

私は恐怖感はあつたもののそれよりも春さんの言つたとおりにその人が切るうつと思っていたのならばその人への怒りのほうがこみ上げてくる

「ほ・・・ほん・・当なの？」

声の震えがだんだんひどくなつてくる

「おいおい、どうした？」

彼は私の隣に座りながら言つた

けれど私が何も言わなかつたから小さくため息をついてからまた話し始めた

「本当だよ。最初に切るうつと思ったのもあの人、今も・・・いや、つこわづきまで斧を振り回し木を切るうつとしていた。いくら止めても言つことを聞かなかつた」

私はだんだん怒りがこみ上げてきた

おじいさんがこの道に招いたのもきっとおじいさん%8

「お～い 起きろ～チビ～」

大声でしかもアミの耳元で言つてやつた

「わつ・・・・な? 何?」

アミをからかうと楽しい・・といふかアミが妹みたいでなんか不思議な感覚

俺は一人っ子だから

「いつまでもチビ扱いしないでよね!—これでも高2なんだけど?」

膨れてそっぽ向いてしまつた

といふか犯人である俺を恐れないアミつて一体どんな感覚でここにいるのか?

「大人は、二十歳を過ぎた人間の事を呼ぶんだよ」

からかいながら言つた

「じゃあハルは何歳なの?」

真剣・・・といふか強い視線で俺の目を見ながら言つてくる

「残念でした」23で～す。もう大人だからな!」

「むかつく・・・」

「そうだ 朝飯出来てるから勝手に食つてろよ」

俺には俺なりにやることがある

情報収集

テレビは音が外に漏れると厄介だし、携帯は電波で居場所がばれることがある・・・パソコンも同じだが、個人的にパソコンがすきだからパソコンで情報収集

パソコンは「倉本 くらもと亜美 あみ」の言葉で埋め尽くされている

きっと警察がアミのことを探し始めた
早くアミを開放してやりたい・・・

けれど俺の仕事が終わるまでは・・・

「ハル~」

「なんだ?」

おれはパソコンから田を離さず答えた

「私・・・一生この服着て生きていくの? そんなの嫌!.. ゼツツ
たいに!..」

忘れてた

ぜんぜん考えてなかつた

こういう氣の緩みがアミを傷つけてしまうんだよな・・・

「家に取り替えるか? 服以外にも口にはないけどアミには必要
なものとつて来い」

作戦なんてない

別に隠れてとりに行けなんていわない

アミを信じてるから

「なにそれ? 私が普通の生活に戻つていいってこと? それも嫌
ほんとにアミの考へてることつて分からない

「どういう意味だ?」

とっても興味があつたからアミの田を見て真剣に話した

「え~・・・だつてさあ・・・こつも的生活に戻るよつここの生活
のほうが面白そうだからしづばらははこせて!..」

「じゃあ作戦考へるか? アミの新しい生活のために・・・

「やつた!..」

作戦はこうだ

? 夜にアミが家に帰り必要なものをとつてくれる

? アミの家の前に俺がナンバープレートを取つたバイクに乗つて

まつてゐるからアミが後ろにのる

? この地下室に帰つてくる終」

そんな簡単に行くとは思つてないがこれもおじこさんのための仕事
だと思えば軽いものだ
けどアリの田隠しを取るタイミングとつけるタイミングを考えなくてはならない

「わ～なんだか楽しそう?」

キラキラした瞳で聞いてくるアリはとても可愛い
「今夜だ! それまでに持つてこなきゃいけないものメモにまとめて
とけよ? それじゃないとつれていかねえからな」
「は～い」

今夜の仕事はいそがしくなりそうだ・・・おじいさん
こんなに可愛い妹のよつな少女に出会えたのもおじこさんのおかげ
だね・・

「よしひ できたぞ」

「なんで田隠しするの?」

「『』がどこかアミに分からぬよ『』・・・そんなのも分からぬ
いか?」

私は別に逃げようと思つてないの』・・・用心深すぎる

私はハルにやさしく手を引かれバイクの後ろにのせられてヘルメットもかぶしてくれた

「しつかりつかまつてろよ 危ないから」

静かにハルは一言言つて

私の家に向かつた

「お前の家どこだ?」

「『月夜麗公園』を北に進んで・・・」

「了解」

誰にも分からぬように真夜中に出発したから今は一時四十五分・・・

周りが見えない私はいろいろなことを考えた
けれど一番考えたのは家からとつてくるもの
わがまま言つた私が失敗してハルを困らせたくない

「ついたぞ ここから声や物音出すな・・バイクの音もなるべく静かにしておくから」

ハルは小さな声で言いながらヘルメットと田隠しを静かにとつた
私が話そつとして口を開けるとハルは私の口を押された

「さつき言つたこと覚えてないのか?」
はじめてあつたときと同じ怖い田だつた

連れて行かれたときに着ていたコートのポケットから鍵を出し静かに家に侵入した

静かに服とくしとが携帯電話・・・は、ハルが使うなって言つと思つけど一応持つていく

外にでて家の鍵を閉め

?お母さんお父さん、これは私の鍵です。帰つてくるまでなくさないようになつておいてください?

といつメモと鍵をポストに入れておいた

「田隠しするから田つぶつてろよ」

私は田をつぶると家の電気がついた

「やべつ」

いつもは冷静なハルもちょっとあせつてた

けどちゃんと間に合つたしハルの後ろに乗つた

帰る途中でハルの背中が暖かくて眠つてしまつた

朝目が覚めた後、携帯でニュースを見た

ハルに携帯は禁止されてるけど一日3分ならという許しが出たから見た

「高校2年生少女行方不明事件の新しい情報が入つてきました。

朝、倉本亜美の家のポストにメモが見つかり、筆跡鑑定の結果、亜美さん本人のものと分かりました」

「はい3分経つたから没収~大丈夫俺アミの携帯興味ないから

私の携帯を取り上げながら言つ

「いいの?メモなんか置いてきちゃつて?」

「ああ・・・いいんだ警察にヒントをあげるんだ。けどそんなに簡

単に捕まる俺じゃないぞ」

初めて犯罪を犯した人の発言とは思えない

私はどうしても知りたかったから朝ごはんを食べているときに切り出してみた

「ハル・・・昔話の続きを?」

「あ? いいよ」

「俺は濡れ衣着せられて警察から逃げてたことがあった」

そういう終わつた瞬間思った

だから簡単につかまらない俺なんだ

「死刑囚だったけれど、濡れ衣以上に最悪なものなんてないと思つて脱獄した

公園にある木の陰に隠れた。そしてその茂みで一週間すごした・・・
公務執行妨害でつかまつたけど濡れ衣は茂みで過ごしている間に晴れたから今生きてる」

やっぱ悪じゃんハル・・・

「だから俺はあの木を守るつて決めたんだ」

私がハルを恐れない理由が分かつた

おじいさんを好きな人はみんなつながつてゐるから・・・

「私も・・・おじいさんに色々なものもらつた・・・おじいさんに出会つたから今・・・ハルとここにいる」

「そうだな・・・」

「そうだな・・・」

二人とも恥ずかしくて・・・新しくつて・・・なんか変な感覚だった
から黙つたままだった

その日の昼食後、アミが倒れた
皿を片付けている途中に
ガシャーン
と大きな音が鳴った

「アミ？」

ハルは心配になつて台所に行くとアミが倒れていた
すぐに駆け寄り声をかけた

「おい、アミ！大丈夫か？」

すごい汗をかいて顔も赤い

ハルが手を額に当てるとすぐ熱かった

「すごい熱・・・」

ハルはアミを抱きかかえベッドに寝かせ落とした皿を片付け氷を持
つていった

アミはしばらくしてから目が覚めた
隣にはパソコンをしているハルが見えた
起き上がるうとすると

「起き上がるな、おとなしくしてろ」

「うん・・・」

アミはもう目が覚めていたけれど頭がふらふらするし、ハルに怒ら
れるから皿を開けたままベッドに寝ていた

「ハル・・今何時？」

ハルは遠くの時計を見てから

「・・・夜の七時だ」

「あれ？私・・・なんで口口にいるの？」

アミは熱が高かつたから思い出せなかつた

「昼に皿片付けてたら倒れたから・・・6時間ちょっと寝てたんじや

ねえか？」

「ふ～ん・・・つひこじまでハルが運んできたの？」

「ちょっとあせつた様子でアミが聞いた

「なんか悪いか？」

ちらつとアミを見ながら言ひとまたパソコンに向かって

「お・・・重くなかった？」

「そんなの今どうでもいいだろ？」

ハルが頭を抱えため息をつくと、アミの額に手を当てた

「ひやつ・・・」

ちょっととびっくりした様子でアミがあせる

「なにびっくりしてんだ？・・・37・6度くらいこってといいか？」

アミは何も言わずじつとしていた

「夕飯食べるか？」

「・・・うん」

ハルは夕飯を取りに行つた

夕飯はおかゆだった

熱の高いアミをきづかつておかゆにしたのでしじう
ハルがおかゆをスプーンで一口分ずくつてから

「くちあける」

「はい？『あーん』しなさいと？」

「そうだけど？なんか文句あるか？」

真顔で答えるハルがアミにとつてはちょっと不思議だった

「文句あるに決まってるでしょ？『ご飯ぐらい一人で食べられるよ

！？』

ハルは一度スプーンをおいてから答えた

「右手見てみる」

アミが右手を見ると包帯が巻かれていた

「なにこれ？」

「皿で手を切ったのも覚えてないのか？」

アミが自分の手を握りつとすると激痛が走った

「いたつ・・・・・」

「バカ 傷口開くだろ? だから言つてんのによお・・・自分で食
えないつて・・・・・」

ハルは笑いながらため息をついた

「いっ・・・いいもん! 左手で食べるから・・・・・」

意地を張りながらアミは答えた

「はしどうやつて使うの? 右利きなのに? そのつえどいつて皿持
つんだよ」

アミをちよつとバカにしている

「・・・ 分かつたよしうがないな・・・・・」

そういうとアミは口を開けた

ハルはちよつと笑いながらアミに食べさせた

食べ終わるとハルは

「風邪は寝てれば治る。だから早く寝ろ」

きつぱりそういうと後片付けを始めてしまった

「じゃあさあ・・・・風邪治つたら料理教えて?」

いつも通り手を休めず、アミに視線を向けず

「お前料理できるだろ?だから教える必要ない」

「だつてさ・・・ハルの料理美味しいから・・・」

「料理関係の仕事してたからな」

アミは料理関係の仕事しているなんて思つてなかつたからとても驚
いた

「・・・凶器がそこの料理店の包丁と同じで俺が疑われて死刑囚になつたつてワケだ・・・」

「ふうん・・・・けど料理教えてね!」

「分かつたから早く寝ろ。病院連れていけねえんだから
うん」

アミがこの生活に慣れるにはちょっと時間が必要・
自分に合わない生活が風邪の元だったのでしょう

10 A secret of Hull (前書き)

顔文字が含まれてきますので、縦書きで読まれている方は横書きで読まれることをおすすめします。

アミは夜中の「時」の田がさめた
やつぱり隣でハルがパソコンをしていたけれど・・・
電源がついたままで、ハルは眠っていた
アミから見たらパソコンの画面が見えなかつたから、まだ足がふら
ついたままでハルを起こさないように画面を見た
どうやらブログを書いていたようだつた。題名は

『A tree of God』

日本語に訳すと「神様の木」

もう少し下まで見て見よつと思つた・・・けど

「んつ・・・」

ハルが目を覚ましそう

「わっ・・・」

アミは一度その場から一歩離れて様子を伺つた
ハルはまたそのまま気持ちよさそうに眠つてしまつたので、ブログ
を下まで見てみた

『月夜麗公園の木』^{おじこや}の隣にいるハルの写真があつて

『この木はボクの命の恩人です。いつも気持ちが安らぎますへへ』

と書いてあつた

このブログをみた人からのコメントに

『最近写真少ないけどどうかしちゃつたんですか?』

本当は警察から逃げてこるけど・・・

『色々いそがしくってへへ 最近、この大樹の事知っている少女に会つたからその子に許可取つたらその子にもこの木について語つてもらおうと思つています！ 写真はなくとも書き込みはするつもりですのよろしくお願ひしますへへ』

顔文字はともかくハルの敬語は始めて見たからアミはひょっとびっくりした

「ん？」

ハルが目を覚ました

「あつ・・・・・」

「読んでたのか？」

ハルが微笑みながら聞いてくる

「うん・・・・・まつ・・・・まあ・・・・」

アミはあせつてたけどハルはそんな素振りを見せないのでなるべく平常心を保つてている

「俺の寝顔可愛かった？」

また笑顔で聞いてきた。きっとふざけてる

「そつ・・・んなのじうでもいいじゃん」

アミが急いで目をそらす

「んーつ・・・・・」

ハルは伸びをして大きくため息をついた

「夜中つて静かだよなー・・・・」

「う・・・・ん」

アミは目をそらしたままだつた

けれどハルは立ち上がりアミの額に手を当てた

「・・・・36・8 くらこか？ もうちょっとで熱下がりそっだからまだ寝てろよ」

アミはハルとビーッしても田をそらしたかつたからひつむきながら静かにうなずいた

ハルはちょっと笑顔を見せてアミの頭をなでると、パソコンの電源を落としていた

「ハル？」

「何だ？」

二人は目を合わせないまま、背中を向け合つたまま会話を続けた

「・・・やっぱ・・・なんでも・・・ないや」

ハルには見えていなければアミは作り笑顔を見せてからベッドに腰掛けた

「なんだよそれ・・・言つことないなら話しかけるなよ」

夜中の静けさが二人の静寂を、より静かに引き立てる

「・・・ミルクティーでも飲むか？」

「ん・・・」

静かにうなずいた

ハルがキッチンに準備を始めた

「ねえ・・・ハル？」

お湯を沸かし、笑いながら

「『なんでもない』とかいうなよ？」

「明日も自分じや』飯食べられないかな？」

手を休めてから

「自分の手を見てから考える」

アミは自分の手を見た

ギュッと握り締めようとしたけれど途中でも痛かったからやめておいた

「ダメそつかも・・・」

ハルはもう準備が終わってアミの隣に座った

「大丈夫だ、俺がついてるから」

今度は一人とも田をそらしたりしなかった
見つめあつたまま、夜中の静けさが二人の時間を止めたままのよう
にする

お湯の沸いた音がした

ぱつと二人とも目をそらしてしまった

アミはちょっとドキドキしながら自分のベッドを見つめた

ハルも同じだつた・・・けど

「お湯沸いたからちょっと行って来るな・・・」

ハルが立ち上がろうとしたけれどアミがハルの腕を田をそらしたま
ま掴んだ

「なんだ？」

ハルはちょっと不思議そつだつた

「・・・もうちょっと・・・もうちょっとだけ隣にいて・・・」

アミが静かな声で言つた

「お湯だけ止めないと危ないから・・・な?止めてきたらいつまで
だつてアミの隣にいてやるよ」

アミはハルを真剣に見つめながら

「本当に?本当に?・・・ずっと私の隣にいてくれる?」

「何甘えてんだよ? マジでちょっと・・・火が危ないって・・・」

ギュッ

アミはハルに抱きついた

「わつ? なんだよ?」

「・・・何も言わないで・・・」

ハルはちょっと困った顔つきで

「おい・・・俺の罪また増やすつもりか? 未成年と二十歳を過ぎ
た人が恋に落ちても罪なんだぞ?」

アミはちょっと強い口調で言つた

「だから何も言わないで・・・」

アミはちょっと強い口調で言つた

火はついたままだつた
そして夜中の静寂が流れた

「おーい・・・離せよ・・・

ハルがちょっと呆れた様子で言った

「う・・・

アミはもつと強く抱きしめてくる

「火だけ危ないから・・・な?」

アミはちょっと考えてから『『『』』』と言わんば
かりに、ふてくされながらハルから離れた

「ありがと」

アミに目を合わせずキッキンに行つて火を消した

ハルが歩いて帰つてくると

「ハル・・・」

またアミが抱きついてきた

「さつしきつから何甘えてるんだ?」

アミは抱きついたままハルを見上げ答えた

「なんで私がギューッとしてあげてるのにハルはギューッとしてく
れないので?」

答えになつてないし・・・

「それはな・・・アミは高校生だからファーストキス的に・・・俺
がお前に抱きついたら・・・なんか・・・

アミが見上げたままちよつとムスッとしながら

「なにそれ? 私に気を使つてるの?」

「うん・・・後悔してからじや遅いぞ? 僕もなあ・・・高校通つてね
えからちゃんと通つてるアミはちゃんと高校生活満喫しきよ~

笑顔でアミをなでながらハルが言つた

「いやつ・・・だつて初恋の人にギューッとしてもうえないので?」

悲しいでしょ?」

「知らねえよ・・・

アミはハルから離れようとしない

「しようがないな・・・そんなに俺のこと好きなのか?」

ふざけて笑つているけどアミはそれでもよかつた

「うそ」

アミは目をそらした

「じゃあそれがアミの願いなら・・・まあ“出来るだけお前の自由にしてやる”つて約束したしな」

そういう終わるとハルはアミを優しく抱きしめた

「あつそうだ!ハルつて彼女いたことないの?」

「ない。別に興味なし」

きつぱり答えた

「じゃあ私は?」

ハルがニッと笑つてから

「ちょっと興味アリ」

「そういうえばアミまだ風邪治つてないだり? 早く寝ろ」

「分かつた~」

アミはハルに甘えながら言つと、ハルから離れた

そしてアミはすぐ眠りについた

アミはちよつと早く目覚めて、地下室中を歩き回つた
ハルの部屋・・・といつてもアミはなく、アミはハルを起しつつた

「ハル~起きる~」

ほっぺをふにふにしながら起つた

「ん?・・・アミか・・・はよお・・・

ハルは伸びをしてからアミの熱を測つた

「よし もう平熱だから寝なくていいよ

ハルが笑顔で答えるとアミも笑顔になつた

するとハルがちょっと真剣な顔つきで言つた

「俺さあ・・・出頭しようつかな」

アミがハルのベッドに腰掛けながら

「なんで?」

「逃げる理由がないから・・・それにアミを開放してやりたい」

ハルは自分の手を見つめ

アミはハルの顔を見つめ

「いや・・・そんなの・・・ハルの隣にいたい」

「いつかは出頭する日が来る・・それが早くなつただけだ」
ハルはベッドから出て、机の上にあるペットボトルの水を一口飲んだ
「料理教えてくれるつて言うのも嘘?」

「俺だつて立派な犯罪者だ。1つくらい普通に嘘つくなよ」

ハルの顔は影で見えなかつた

ただ、ペットボトルの中の水が電気の光で輝いていた

「」めんな・・・教えられなくて」

アミと田をあわせようとしたしなかつた

ずっと床を見たままだつた

「今日出頭計画話すからメモ取るなり何なりしりよ・・・

黙つてキヤップを閉め、机の上におくと部屋からハルは出て行つてしまつた

アミも部屋から出て自分の部屋で着替えをした

コンコン

アミが着替え終わつて本を読んでいるとハルがやつてきた

「入るよ」

そう一言言つてからハルは入つてきた

田を合わせるのが嫌だつたからアミは本から田を離さなかつた

「出頭計画話すからちゃんと聞いてるよ。1つでも間違えたら・・・

俺とアミは会えなくなるからな」

アミは気分が優れないままハルの話をきちんと聞いた

「ああそうだ、実行日は明日だからな・・・アミを早く開放してやりたいから

（次の日）

アミは携帯で警察に連絡した

「あの・・・女子高校生誘拐事件被害者の倉本 亜美です・・・」

「え？・・・本当に倉本亜美さんですか？」

「はい。住所を教えるので来てください・・・」

電話が終わると

「俺が刑務所に入つたら文通してくれないか？」

アミは笑顔で答えた

「いいよ ハルが望むなら」

「本当にアミって変なヤツだよな。最初から思つてたけど・・・犯罪者の望むようにしたりとかせ・・・」

ハルは笑いながら言った

二人は警察が来るまで絶えず話をした

ドタドタドタ

警察の足音が聞こえ始めると二人は話をやめ、計画を一人ひとり心中で振り返った

「手を上げろ！」

そういうて拳銃を持つた警察が入つてきた

ハルはおとなしく手を上げた

警察の中でもいかにも偉いですよ

という感じの人が

「あなたが倉本 亜美さんですね」

と、アミの手を引いた

そのあとアミは警察の手によって保護された

アミはハルのことを見なかつた

ハルの命令を守つたからだつた

けれど音を聞いていると、ハルは警察に抵抗はしていないようだつた

た

久しぶりの太陽の光を浴び、アミは監禁生活の幕を閉じた。

今までと同じ、普通の高校生に戻った。

ミキ達とも今までと変わりの無い生活を送っている
ように見えた。

アミは、監禁生活を過ごした時間と同じ大きさだけ心に穴ができた
みたいだった。

「アミ？私の話聞いてる？」

その言葉がアミに沢山降り注いだ。

でもアミには、新しい趣味ができた。

文通と料理

色々な料理を沢山つくっては、写真を撮つて文通相手の手紙に入れ
て評価してもらひのがアミの日常。

文通相手は、刑務所にいる女子高校生監禁事件の容疑者

「峰岸 春」

彼は、生きがいと言ひ乍の仕事を終え、監禁生活を終へさせた「自

分勝手」な男だった。

アミはハルと恋に落ちた。

それがアミの心の穴。

アミは、ホームルームの時間、クラスの人にできるかぎりの監禁生
活の日常を話すことになった。

「アミ？？？ごめんなさい」

3人に謝られて少し戸惑った

「ううん いいって、先に帰った私が悪いから????」

クラスメイトからも、

「可愛そう」

とか、そんな囁きも少なくては無かつた。

クラスの一人のある女子が、

「監禁生活じやガムテープとか紐とかで縛り付けられてたの?」

「ハルは、そんな人じゃない!!!!」

そう言いたかつたけど、そんな事言つたら、ハルの出頭計画は台無しになつてしまふから

「そこまでじゃないけど厳しかつた。」

と、答えるしかアミには出来なかつた。

ハルを悪役にするような言い方を続けたアミの心は、穴だけでなく、まるで鋭いナイフで切り裂かれたような傷もできた。

アミにとつてハルは、兄のような存在で????? そう思つていらうがにハルは、兄から王子様になつてしまつて?????

お姫様には、王子様を悪人呼ばわりするのが苦しかつた。

お姫様は学校意外はほほ、外出を禁止され、ただの飼い慣らされた子猫みたいになつてしまつた。

つい最近まで、とつても怖い狼と過ごしていたのに?????

ピンポーン

「ここにちは

笑顔で軽くお辞儀をしたミキの後ろには、ケントとキヨウスケが立つていた。

「どうぞ上がってください」

スリッパを用意する母は、嬉しそうで????? 私は、3人を二階の私

「アミは、キヨウスケくんと、ケントくんは、どちらがタイプなの
母といっしょに用意していると
の部屋に連れてきてくれる、下のキッチンに行つてお菓子や、お茶を
？」

微笑む母は、ちょっと若く見える。
「秘密」

秘密

（私はハルがタイプです）
ウインクしてから、部屋に向かう途中に、アミは、
と思った。

部屋に戻ると、4人でトランプをしたり、話をしたり？？？すゞく盛り上がった。

気付くと、日が沈みはじめていた。

「じゃあ私とキョウスケは帰るけど、ケントも帰るでしょ？」
「んー？？？家帰つても誰もいないから？？？残らうかな？」
「ふーん？？？じゃあ帰るね！おじゃましました。」

2人は帰つてしまい、ケントとアミの一人つきりになつてしまつた。

「アリヤも？？？」

「ん？」

ケントは、アミを真剣な目で見た。
そしてアミを優しく抱きしめた。

ケント？」

「俺????アハの」と好きだから?????」「

アミの温もりを感じて数秒後、アミは

「あつ」

つと窓を見ていった
俺は背中を向けていたから分からなかつたけど…アミから離れ、窓を見た。

窓の外には、男の人気がいた。「誰?」と問いただそつと思つうけにアミは窓を開けた。
俺には不審者にしか見えないけど…アミとビビのよつな関わりのある人が、少し気になつた。

「あ〜ありがとね」

笑顔を見せながら彼は入つてきた。
この人自体だけみると、不信感はないけど…窓から入つてくるとかどう見ても怪しいんですけど…。
アミも笑顔だからまあいつか…つてやつぱよくない?

「ひんにちは」

この笑顔で人柄を複雑になつて、もう頭がおかしくなりそう
でも挨拶されたからには返さないわけにも行かないんで…

「！」・・・「ひんにちは」

「二人とも静かにしててね？ちょっとでも大きな音たてたら…」

そう彼が言いかけたときはアミが「分かつてるとそんなの」と笑顔で駆け寄る

כטראטן

不審者ではない。

「うそそれよりなんでこんな奴いるの？」

こんなとこつてなに？

不審者は無しとして…怪しいんですけれど人の

「え～…アハハ念おうと思つて脱獄してきた」

脱獄う？

「どうがこの人真顔で『脱獄』とか言っちゃってるんですけれど?」

黒崎一也!!

アミ普通に話してるし……こんなに危ない橋渡つちやつて大丈夫なのが?

「ダメじゃん！ ちゃんと罪を償わなきゃ

アリがちよつとせりてぬ

「あんなによくしてやつたのに【罪】なんていいつのへ
やんばんなに意地悪になつたのかな～？」

「アミが好きとかどうとかじゃなくて…誰ですか」の人？

「はいはい…負けましたよ。ハルさんにはかないません」

ハル？

春？

えーと…なんか聞いたことあるな…

「あ～キミも大変だね～こんな無愛想な女の子と仲がいいなんて」

この言葉はスルー

今の俺の脳内は、検索ワードを『春（人名）』として、記憶を探しまくつている途中だから…

峰岸春？

峰岸春つて…アミ監禁した人じゃん？

アミと峰岸春（？）の喧嘩をよそに、彼に話しかけた

「あの…失礼ですが、あなたはもしかして『峰岸春』さんですか？」

「正解！」

なんかこの人テンション高いんだけど
なんか犯罪者確定なんだけどお？

俺は携帯を取り出して、警察に連絡をしようと思つた。

「連絡したいならどうぞ。止めないんで」

笑顔と真顔しか見せないし。

止めないってどういうことだ？

それどころか、俺の指のほうが止まってしまった。

「やつぱりこう風に言つたら入つて電話やめるんだね~」

なんかムカつく人の人。

犯罪者で

脱獄犯の癖に平常心つていうのがイライラしてくる。
ここで怒つても向こうから今のよつた言葉が帰つてくるだけだ・・・

「あ！ セウだセウだ！ アリテ伝えなきやいけないとがあった
んだつた！」

今更？

「俺、明日あの世へ旅立つんで」

だからその真顔がムカつくんだよ・・・

「え？ ねえやだ！ 料理教えてくれないと死んじゃだめー・・・

犯罪者にこんなに人がなつくとは思えない。
動物扱いしてアミには失礼だけど。

「だから・・・お前人の話し聞いてんのか？ ていうか充分
うまくなつただろ？ 手紙の中入つてたし」

手紙？料理？

もう意味分からんだけど・・・

「いや！ ハルが犯罪者でも教えてもらひのー。」

「なんだよ。俺の言つたこと覚えてるじゃねえか

もつ話は入れない。

俺は完全に仲間はずれ

「なんで死ぬの？ 方法は？」

「俺の任務を果たしたし・・・方法はこれ」

ニッと笑みを浮かべながら言つ姿が憎たらしい
彼の手には、小さな袋に入つた薬品的なもので…

「あのおじさんを殺したときのあまりでしょ」

ちよつと怖い目つきになつた

「正解！ よく分かつたね～」

アミは彼の今までの事件と深く関わつてゐるよつだ。
すゞく危険な少女だな。

まあもとはと言えばアミを一人にした…
つて俺が悪いのかあ！？

彼はアミを軽く抱き寄せてから

「ついてくる？ それとも残る？」

彼は笑顔を絶やさなかつた。

「行くに決まってるでしょ・・・。」

「ハルに抱きしめられたアミは、ちょっと頬が赤かった。

「そういうことだから。キミは警察署に面つなづ何なり勝手にしていいから。」

ケントはまだ何も言えず、アミも黙つたままだつた。そのまま、ハルはアミを連れて窓から出ようとすると、ケントが口を開いた。

「・・・アミを殺して自分も死ぬつて言つのかよ。」

「やうだよ？ でもアミは、それに同意してることを忘れないでね。」

「おー！ アミー、それでいいのかよ」

アミは振り返らず答えた。

「私は・・・それでいいの。ハルと一緒にいたいから・・・」

「・・・だつてさ・・・じゃああ、鬼じりしない？」

ハルは笑顔だつた。

「俺は、アミと逃げるナビ...キミは、警察なり、アミの家族なり...」

とにかく人間を集めてもいいし、俺たちを捕まえたらキミの勝ち。
けど、今は……五時だから……今日の夜八時半、までに捕まえな
いと君たちの負け、俺たち死ぬから。」

「はあ？」

「ハル？ そ……んな……？ 命をかけたゲームってこと？」

コンコン

「一人以外に誰かいいるの？」

アミの母の声だった

「じゃあ、スタート！」

ハルはテンションが高かつた。

外にでると、窓からはアミの母がアミを呼んでいる
そんなことをよそに、ハルは、

「ああお姫様、走りますよ！」

「わわっ…」

アミは、がんばってハルについて行つた。
近くの海に来ると、日が沈みかけていた。海は夕日に照らされ赤、
オレンジ、青のグラデーションが綺麗に輝いていた。

「もちろんあの場所だよね。」

「当たり前」

「…なんで残らないで俺についてくるって言つてくれたの？」

「だつて、やさしいハルのこと…大好きだから…。」

二人は一度立ち止まつた。

最初は目を合わせないでいたけど、振り返つた瞬間が同時だつたから…目が合つた。

「俺は、やさしくなんか無いよ？ だつて犯人だもん。」

ハルは、アミにキスをした。

「んっ！？」

アミはびっくりして目を開けていたけれど、そのあとゆっくり目を閉じた。

ハルがアミから一歩離れると、

「アミ……愛してる」

「ハルは、大好きのほうがぴったりだよ？」

ハルより背の低いアミは、背伸びをして、またキスをした。

「アミは、この海より綺麗だから……」

「ハルのお世辞は要らない！　ただ……大好き……それだけでいいの……」

「わがままだな……最初から最後まで……」

「……バカ……」

「アミ大好き」

そういうつてアミを抱き寄せた。

「彼氏に抱かれたときも、こんな感じだつた？」

「彼氏じゃない！！！　私の彼氏はハルだからね！」

「よく言ってくれました。」

「ハルのバカ！！！」

「「めん」「めん」

アリの頭を優しく撫でた後

「じゃあ逃げようか…。」

お姫様の手を引き、また走り始めた。

17 The winner 〈前編〉（前書き）

軽く残酷な描写アリなので気をつけてください。

一人は月夜麗公園の茂みにいた。

「…八時二十分…俺らの勝ちだ。」

「そうだね…」

日は沈み、真っ暗な闇の中で八時半になるのを待った。

「ちよつとのど渴いたから、水飲んでくるね。」

アミは近くの水道で水を飲んだ。

「私の寿命も…後十分…」

茂みに戻ると

「…ソーラ辺も警察がつめついている…もハハハから一歩も出ぬなよ

命令はアミにとつて慣れっこ。」

「…ここにいるのは分かっている…おとなしく出でこ…」

警察の声がする。

心臓の音は、早まり、頭が真っ白になる。

「…つばれたか…」

「峰岸春…… 兄を殺したのはおまえだな！」

そう叫びながら入ってきた警察は、アミの家には何度か、監禁事件について色々聞かれたときにやつってきた警察だつた。

「やつ…… 山本さん……？」

「アミちゃん？ 何でこんな所にいるんだ？」

「自分の意思で……」

ハルは平常心を保つてゐるよつて、（といつてか警察に慣れてるだけ）時計を眺める。

「八時一十五分」

「絶対にお前を許さない」

この公園にいる人物は、

ハル、アミ、山本

の三人

山本はハルを憎しみの眼で見ている。

「どうしたんですか？ 山本君？ お兄ちゃんの後をつけで……大きくなつたね～早く捕まないと八時半になつちゃつよ～、まあどうちにしても……」

ハルの言葉が終わらないつて、山本はハルを拳銃で撃つた

「兄を裏切つたお前を絶対許さない」

「つたく…顔かすつたじやねえか…やっぱり教えてくれなかつたよな…人の話は最後まで聞けつて…お兄ちゃんに。」

「ねえ？ ちょっと…ハルは山本さんたちと何かあつたの？」

これも残酷な描写が入ってきますので、注意してください。

「コイツは俺に濡れ衣を着せた犯罪者の弟だ。 そいつのせいで俺は死刑囚になつた。」

「違ひ！ 兄はそんなことをしていない！」

山本さんは拳銃を構えたまま…

どっちを信じたらいいの？

普通の人なら、警察と犯罪者が戦ついたら警察を信じるでしょう。けれど私の初恋の人を裏切るわけには行かない…

「アリちゃん… ひしだおいで

「アリ、俺を信じる。」

携帯の時間を見た。

八時一十九分

「ハルも、山本さんもやめて！ 後一分で…」

一分…

後一分で、この公園には最高三人の血が流れる」とになる。

・・・・・

『俺さあ… お前の「とひれいんだよ… 峰岸』

『なんでだよ?』

頭をかきながらめんどくさうな山本の兄。

『俺より後にこの店に来たくせに、お前の料理のほうが人気があるのが』

『そんなの実力の問題だろ?』

『だからね~キミの包丁で料理長を、お料理してみたんだけ…俺より料理の上手い君なら評価してくれるよね?』

『・・・』

『遺体を、なるべく無残な感じにして置いたから…きっと遺体が見つかるのも時間の問題だよ?』

・・・・・・・

「料理長を殺した兄をよくそんな風に言えるよな。俺より料理が下手なのは当たり前なんだよ! 元警察なんだからよ!」

ハルの目が怖い…

元死刑囚の目が怖い…

「お前だつて兄を殺した! 人殺しに変わりは無い!」

「俺は殺したが濡れ衣など着せていない!」

私はどうしたらいいの?

友達を裏切つて、逃げて、元死刑囚の人殺しに監禁され、生活をともにし、犯人の言いなりになつて、今だつて迷つてはいても警察より犯人を信じてる…

・・・今何時？

18と同様です。

そして、途中から、セイラの話に戻ります。

・・・八時三十分！――！

「ねえ・八時半になつたよ・・・」

「やうが・」

ハルが、少し氣を抜いた。

パンツ・・・

公園に銃声が鳴り響く・・・

・・・・・・・

「『』めんなさいね、日が暮れる前に話しあわると困つたら、長かつたわね…退屈だつたでしょ？？」

アオイは、咳払いをして姿勢を正しながら

「いいえ…でも、ハルさんは…」

「ええ、あのゲームに勝つたのは警察達…ハルはこの世に存在しない」

ケイがちょっと好奇心を秘めた目で、

「アリはどうなつたの？」

「そのあと、ハルの青酸カリで自殺したの」

ルイが、

「なんでお前はこんな物騒な話しつてるんだ?」

「あれ? 私の名前教えなかつた?」

「え?」

「『やまもとせいり山本星羅』これが私の名前」

本日を持ちまして、「子猫さんと狼さん」を終了させていただきます。

この作品は、もちろん妄想の中で生まれたのですがかなり変わっていますので、踏み切りのよう、「？」情報を伝えしたいと思つてはいます。

そして、気が向いたら外伝も書こうと思つています。気まぐれなので、まだよく分かりませんし、この作品を読んでくださっている人がどれだけいるか、どれくらいの方々に愛されている作品なのかが分かれば書きたいと思います。

今まで「」愛読していただいた皆様。
ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8205p/>

子猫さんと狼さん

2011年2月14日12時35分発行